一橋商品学の伝統

井出野栄吉

一

一橋における商品学は最も早くから授業されたものである。初期の商法講習所時代には商品学という名を見ないが、中期すなわち明治十三年の規程には物産誌という名のもとにこれが課せられている。その後幾たびか学則が改変されたが、商品学は常に重要な学科として課程の一角を占めて今日に至っており、一橋の歴史と共に生き抜いているのである。このように商品学は学科としては古くから存在していたものであるが、これを教授陣の方から眺めると二つの大きな特徴を認めることができる。一つは教授間には殆んど師弟の関係はなく他の大学の卒業生がつぎつぎに一橋に来てこれを継承していることである。もっともこれは或は一橋だけのことではなく、商品学そのものの性格によってそのような形をとったまでの事で、他の大学においても屢々同様な事は見られることではあるが、本学全体から眺めると一つの特徴といってもよいであろう。残る一つは今日まで百年の間一橋においては商品学を担当した教師は最初に理工学を専攻した人であると言うことである。師弟関係のない人々がつぎつぎに一橋に入って担当する商品学が、学派的なものを生ずるかどうかと言う疑念は一応あるが、少くとも東京商業学校時代の商品学に対する学的態度が今日においても一部持続されている事を見ると、むろん学派的なものではないが、一橋の商品学が大体一つの方向を指して来たことは確かである。これは商品学の担当者が理工科

系の出身であったこと、後継者は前任者と数年間同僚として共に過すように仕組まれて来たこと等にもよるが、一つには一橋商品学というものが大体できてきて、一橋学園の大きい抱擁力と共に、人をこの中に引き入れるものによると考えられる。

二

明治五年学制頒布、六年更に学制が追加されて専門学校の規定が設けられ、その中に商業学校を認め、その本科においては、一、記薄法、二、算計法、三、商用物品弁識（其原由、其使用、其性質、其価値、其真偽、其試法）、四、商業学、五、商法を講述することが制定された。この制度はむろん当時のヨーロッパのものに倣ったものであるが、我が国の実情はまだこの制度を実現するまでには到達しておらず、遂にこれは企画のみに終っている。ここに言う商用物品弁識とは今日の商品学の事であり、前記五科目の内の一つとして採りあげられているところを見ても、明治初年においてすでに商品学は重要視されていたことがうかがわれるのである。

明治八年米人を中心とする洋式商業教育機関として開設された本学の源である商法講習所における教科内容を見ると帳合法、経済書、商法律書、商業算術書を講述し、英習字などを習得させることとなっており、商品学に該当する学科の設定は見られない。商品学はヨーロッパ、ことにドイツを中心に発展した学であり、今日においても米国では特に商品学と名付けられているものはない状態であり、講習所が米式をもって始められたことを考慮すれば、当初商品学が設定されていないことも不思議ではない。

しかしこの学科課程は開所初期のものであり、後には科目の変更が行なわれているが、明治十二年の講習所講義要目には商品学に当るものは見られない。明治十三年には規則が改正され物産誌という科目が挙げられ、この中で天然物産誌および人造物産誌が講ぜられ、さらに物産を国内の部と外国の部とに分けて教授されている。この物産誌が今日でいう商品学であり、本学は少くとも明治十三年にはすでに商品学を講述しているのである。同時代に製産法というのが規定されているが、これはむしろ応用化学と見るべきものであろう。商品学関係の教科書としては、ブラウン氏物産誌、イーツ氏産物沿革誌が

明示されている。これらの書物の内容および当時の講師名はこれを詳にすることができない。後の明治十八年には教科書として日本商品誌、ブラウン氏商品誌および文部省から出版されたイーツ氏の商業博物誌（瓜生氏訳）がある。

イーツ氏商業博物誌（John Yeats: Natural History of the Raw Materials of Commerce）の原典第一次刊行は明治三年のことであり、この書物には地球上で産出される広範な商用の物産が論述されている。これは、全世界を一大倉庫とみなし、その中に蓄蔵されている諸物に通暁し、商業に従事するに当って物品の処理を正常円滑にするのが目的である。本書の第一部は英国、近隣ヨーロッパ諸国および英領植民地の地理ならびに外国貿易の関係が記述されており、英国を中心として地理学と地質学的見地とから生粗品を論じたものである。ここでは英国鉱産物、動産物、植産物、ヨーロッパ諸国の特有製品論、アジア生粗品論、若干の人為的変化物産を取扱っている。第二部においては植物界商品論と題して食用植物、医薬用植物および工業用植物よりの各製品、第三部には動物界商品論として動物所産有用物、第四部には鉱産物をあげている。要するにこの書物では、商品の分類の基礎を博物分類におき、それぞれの商品に地質学的なものを配して商業取引に関係あるものを特に詳細に説明するという態度が採られているのである。

三

明治十八年九月には東京商業学校は東京外国語学校および同校所属高等商業学校と合併し、文部省直轄の東京商業学校となり、翌明治十九年五月、商品の担当者として理学士石川巌氏がその教諭になっている。講習所時代は不明であるが、文部省直轄となってから最初の商品担当者である。石川氏は翌明治二十年高等商業学校となってもこれを担当し、引続き明治三十五年他界されるまで商品の講義を行なっている。その在任期間は必ずしも長いとは言えないが、それが初期の時代であっただけに一橋商品学の形成に大きい影響を与えたと言わねばならない。

石川氏の授業内容は、その著書「重要商品誌」（同文館蔵版明治三十年版）で見ることができる。石川氏は明治三五年現職のまま他界されているから、この著書は氏

の晩年の作であるが、恐らく高等商業学校初期における講義をまとめて刊行されたものと見ることができる。市販を目的としているため講義内容よりは若干程度を下げたものであることは、巻頭にも記しているところである。この「重要商品誌」は第一章農産、林産製品、第二章水産製品、第三章工業製品、第四章鉱業製品と四章に分類され、個別品目についてそれぞれ説明がおこなわれている。この分類方法は、今日の食料品、衣料品、燃料などに分類する方法からすると粗雑になっている感じがあるが、取扱っている個別品目については特に問題視されるものではない。例えば、農産ならびに林産副生物中に米、茶、砂糖、藍、棉花、繭、羊毛並獣毛、大麻亜麻其他麻類、蠟、樟脳並脳油を、水産物としては鯨、昆布、煎海鼠、乾鮑、寒天、鱶鰭、乾鰕等、魚油を、工業製品としては陶器、七宝、硝子、漆器、綿布、毛糸、毛布類、蚕糸、絹布類並毛布、燐寸、地蓆、麦稗真田を、鉱産製品としては鉄、銅、アンチモニー、亜鉛、鉛、錫、マンガン鉱、銀、黄金、硫黄、石炭、石油をあげている。

これらの項目を見て感ずることは、その商品が著るしく日本的なものが多いということである。講習所時代の教科書であるイーツ氏の商業博物誌にあげられているものと比較すると相当の相違がある。これは石川氏によって従来の翻訳商品学からわが国に適合した商品学が樹立されたものとみることができ、石川氏の功績と言えるのである。これらの商品の項目を見ると、いかにも明治初期のわが国の経済界を反映していることがうかがわれる。すなわち、米、砂糖とならんで藍をあげ、樟脳をあげ、工業製品の第一に陶器、ついで七宝さらに漆器あるいは麦稗真田が取りあげられているように今日からみると主要ではない商品が主要商品の中に入れられているのである。殊に、米の項をみると、日本米が輸出米としての資格を論ぜられており隔世の感がある。日本米はその年の豊凶作により輸出可能額に著るしい差があるから、一つの安定な商品とみることはできないと断定しており、農業国日本の姿の一面を示している。

石川氏は明治十九年から明治三五年にわたり満十六年間一橋で商品学を講じ、この時代に一橋の商品学を方向づけ、その傾向は今なお一橋商品学の中に存続しているということができる。以後一橋で商品学を講ずる人はすべてその基盤を理学におき、最初に理工学を専攻してい

る。むろん商品学の後継者の人選に当ってそのようなことが明文化されてはいないが、これは不文律に行なわれたところであり、本学商品学の伝統の一つとも言えるのである。

石川氏の商品学は理学的色彩の強いものである。商品学がヨハン・ベックマンによって技術的な部門と叙述的な商業学的部門とに区分され、技術的な部門を工芸学と呼び一応商品学から離し商学としての商品学はこの技術的部門のないものとされた。しかしこの技術的分野を抜いたものは支柱のない建築物であるとし、ベックマン以前の形を継ぐものもあって商品学に二派を生ずることとなった。石川氏のとられた商品学に対する態度は技術面を支柱として入れたベックマン以前のものである。恐らくはドイツから取り入れた商品学が理工学的色彩の強いものであったことによるものであろうが、一橋が理学士石川氏を商品学の教諭に選んだということはすでに一橋の商品学に対する態度が決められたことと考えてよいであろう。石川氏は更にそれを進展させて一橋商品学の方向づけを行なったものと考えられる。

石川氏の商品の取扱い方は個別商品について産出ならびに貿易の状況を説述し、次に原料ならびに製造、性質ならびに用途、種類ならびに品位、荷造等の項目を設けて説明している。この形式はむろん石川氏の創案によるものではなく、古くから用いられまた商品誌等においても見られるところである。石川氏の商品学は全体としては理化学的色彩が表われてはいるが、商学的分野の取扱い方も適度に取り入れてある。貿易、品位、種類、荷造等の項がこれに当り、分量から言って多いとは言えないが、原料、製造、性質という面と均衡がとれていて、特に生産方面のみを強調しているというようなことはない。石川氏の商品学の取扱い方は「重要商品学」から類推すれば、理工学を支柱としこれに適度の商学的取扱いを加えたもので、しかもこの二者をよく調和せしめたものと言える。むしろ商学的雰囲気の中で理工学を調和せしめたものと言える。ドイツ流の理工学的色彩の強いものではなく、それよりもずっと商学的な商品学となっている。

「商品」あるいは「商品学」という名称についてここで一言述べておこう。明治十九年五月、石川氏は「商品」を担当している。以来明治三六年に本科学科課程の

改正が行なわれるまでは「商品」と呼ばれていた。明治三六年からはそれまで呼ばれてきた「商品」の名称を「商品学」と改称している。（この呼び方は大正四年まで続き、大正五年からは再び「商品」と呼ばれるようになり、新制大学発足の昭和二四年からは、また「商品学」と呼ばれるようになった。）これは従来「商品」が商品誌的に取扱われてきて、学とはなっていないという考え方から、その水準を揚げて学として取扱うようになったからとも言える。この「商品」の昇格にも石川氏は大きく貢献しており、その功績は大きいものであった。

石川氏は明治三三年フランスに留学、翌三四年五月帰国し、明治三五年七月まで商品学の授業を担当している。石川氏に次いで商品学を講じたのは応用化学専攻の工学士猪原吉次郎氏である。猪原氏は明治三四年九月より明治三七年八月まで一橋の教壇に立って商品学を講じている。猪原氏の商品学はその担当期間が短かかったためもあってか石川氏の商品学をそのまま継承したものと言ってよく、明治三六年の東京高等商業学校一覧によれば商品を鉱業製品、工業製品、農産、繊維並繊維製品および水産の五つに分類し、それら分類に入る個別商品について、産出並需要、使用、所在、成分性質並変化、製法、混合物検定並品位鑑定、種類、売買の慣習、荷造法の各項にわけて講述している。

明治三七年九月から翌三八年八月迄の一年間は商品学は休講となっている。次いで明治三八年猪原氏に続いて奈佐忠行氏が商品学を担当することになった。奈佐氏は地質学専攻の理学士で商品学の外に商業地理を担当された。大正九年大学昇格後は木村恵吉郎氏と共に商品学を講ぜられ、昭和三年四月退職された。奈佐氏は商品学あるいは商品を二四年という長期間にわたって担当されたわけでそれ迄のところこれだけ長く商品学を担当された人は他になく、それだけに奈佐氏は一橋の商品学に大きい影響を与えたと言える。

石川氏、猪原氏はともに化学専攻の士であり、両氏は一橋草創時代における商品学の方向をきめたことは前述の通りである。奈佐氏は地理学を専攻し、商品学と商業地理とを講ぜられた。地理学ことに商業地理学は理学系というよりもむしろ文科系に近い学であり、従って奈佐氏の商品学はその専攻の影響を受けて石川、猪原両氏によって樹立されたものをそのまま継承するというもので

はなかった。ここで一橋の商品学は一つの変化を来たしたのである。奈佐氏は著書を残さず、僅かに講義ノートによって氏の商品学のあり方を見るのみである。その取上げている商品の種類にも前任の石川氏のとは明らかに差があり、理化学的色彩は強く出ていない。むしろ地産品というか農産品というか植物性商品ならびに動物性商品の講述を主体としているものである。一橋大学の商品学は極めて古くから置かれている学科であるが、学科担当者間には必ずしも師弟関係があるわけではなく、担当者が替ることによってその取扱い方が変化するものであるが、百年の商品学の歴史を通じてこの時が最も変化の大きかった時期であったと思われる。すなわち、理化学的色彩のものから農学的地理学的色彩の強い商品学に転移したのである。しかしこれは石川氏の商品学と奈佐氏の商品学とを比較したからこのように考えられるのであるが、一橋全体としてみるときはそれ程の変化ではなかった。それは奈佐氏が商品学を担当した同じ明治三八年に応用化学専攻の工学士木村恵吉郎氏が着任、応用化学を担当している。これは石川氏が以前より担当していた応用化学および商品学を二分して一つは奈佐氏が担当し、他の一つを木村氏が担当したものであり、大きく見ると石川氏の商品学に対する態度は大部分継承されているからである。すなわち、商品学のうち理化学色彩の濃厚な部分は木村氏が応用化学の名称の下にこれを受け継いだとも見られる。従って実際上、一橋としての商品学に対する教育効果には大した変化はなかったと思われる。しかし商品学単独についてみると、このため一つの転換をみることになったのである。これは明治三八年のことであるが、これから大正九年大学昇格に到るまで一橋商品学は表面は奈佐氏の独り舞台となった。

奈佐氏の講義は木村氏の応用化学と組んで一体となるように意識的に配案された関係かその内容は著るしく偏っており氏の講義ノートによると、緒論を講述した後は植物性商品、動物性商品を取りあげているのみである。むろん年によってその内容が異っているのであろうが例えば植物性商品としては米、麦、豆、砂糖、果実、茶、コーヒー、アルカロイド、香味料、木材、繊維類を、動物性物質としては脂肪、皮革、肉類、魚類、鳥類、をあげている。

奈佐氏は商品学とは商品について種々研究する学であ

るとし、その基になる商品そのものについてはあまり厳密な定義はくださず、ただ商店で取扱うものという程度の意味に解しているようである。その商品について何を考察すべきかについては、物理的および化学的外見、源泉、組成、性質、用途、製法、商品の種類分け、荷造りの方法等をあげている。物理的化学的に調査するという意味は、例えば顕微鏡を用いて繊維を調べるようなことであり、また化学分析を個々の物について行なうことはできないが、単に化学上の性質を調べてその物を確認し又は良否を判定するといったようなことである。大体は物理的性質によって商品を決定するのが便宜的であるが、それだけでは十分ではないので化学的方法も用いるのである。源泉とは商品がどこで出来たかを調べることである。その商品の産地を明らかにすることが商品研究には大切であるということである。組成とはある商品がどんな成分から成り立っているかということで化学によって決められる。鉱石などではその中の成分によってその価格が異ってくるので組成の研究は重要であるという意味である。性質とは丈夫さ、保存に適するかどうかということなどを決めることである。製法とは単なる製法の研究ばかりでなく、製法が簡単であるか複雑であるかによって、商品の品質にどういう影響を与えているかをも研究するのである。商品分類とは商品にその産地の名称又は輸出入港の名前をつけて商品の種類分けをするようなことである。荷造りは商品の本質とは別であるが、商品が運搬されるときには必ずおきる問題である。商品の運搬に際しては商品を保護し、しかも必要以上にその容積を増したりあるいはその重量を増加するようなことは避けなければならない。そこでこれらの問題を取扱うというのである。

奈佐氏の商品学の取扱い方は、単に商品の生産方法を強調するというのではなく、すべてを商品の特性すなわち運搬性、保存性、代替性といった性質に強く関連させながら、一方ではまた貿易という立場に立ちながら商品を考察していくという態度である。例を米にとってみよう。奈佐氏はまずわが国の米穀事情を論じ、中国の禁穀令および中国よりの輸入ルートについての所見を述べ、東南アジア地域における米産特殊事情に論及し、さらに欧米の米穀生産にも及んでいる。このような取扱いは米穀政策とも緊密な関係にあるもので商業地理の色彩の強

いものである。むろん、米の性質ならびに品質などについては一般に行なわれている通りに講述されている。米の貯蔵についてはかなり微細にわたって説明が行なわれ、常平倉にも論及している。殊に外国米は貿易的な見地から取扱い、その包装単位、包装状況、輸入税、相場の標準、取引慣習、CIF、FOB、取扱商社名、出廻期、品質検査の方法、倉敷料などに至るまで講義されつくしている。すなわち、米に関して、内地米、外米の性質や品質検査の方法などの外商品としての荷動きおよびそれについて必要な取引慣習をも講述するという態度である。

奈佐氏は明治三八年から大正年間を通して一橋において最も長期にわたって商品学および商品を担当した人であり、その間一貫した教育方針を持ち続け、一橋の商品学に一つの傾向を与えたのである。石川、猪原両氏によるものは度々述べたように理化学的色彩の強いものであり、もし次にまた化学専攻の者が商品学を継いだとしたら或は一橋の商品学は奇型的なものになっていたかもしれない。奈佐氏は理学出身の方ではあったが専攻が地理学であったため必ずしも理工学に偏せず商品学を正常な形に持っていったのであって、その功績は大きく評価しなければならない。奈佐氏の商品学は大正九年大学昇格を期として、奈佐商品学と木村商品学とに分かれ、昭和三年四月奈佐氏退職の後は昭和五年佐藤弘氏がこれを受け継がれた。ここで応用化学を専攻し商品を担当された木村恵吉郎氏について述べることとする。

木村恵吉郎氏は明治三八年以来応用化学を担当し、大正九年大学昇格と共に商品の講座を担当した。ここにおいて商品学は商品という名の下に木村氏と奈佐氏との二人によって講義されることになった。商品学を商品と呼ぶようになったのは大正五年本科学科課程が改正されてからのことで、大学昇格を機としたものではない。大正の初め頃から商品学が学としての存在を論ぜられ、商品という一橋初期の名称に復したのではないかと思われる。ここで商品学は複数の人による同時並行講義が行なわれるという他の大学では殆どみられない形がとられることになった。これは本学がいかに商品学に力を入れていたかということのあらわれとみることができよう。これ以後、一橋では商品学は二本建となり、一つは化学的色彩の濃い商品学（後の化学商品）と一つは地理学的色彩の強い商品学とが同時に講ぜられたが、後者は昭和三五年

佐藤氏が退職された後に学科目が変更されるに至り、その性格に変化がおこった。

木村氏は大正九年大学昇格の年から昭和十二年四月まで、常勤として、またその後二カ月は講師として商品学を担当し、一橋商品教育には強い影響を与えた。木村氏は商品担当以前十六年にわたり高等商業時代の応用化学の担当者であり、従って氏の商品学は極めて理化学的なものである。木村氏の商品学の授業は氏自ら謄写原稿をきり、これを印刷に附し、教室内でそのプリントを毎時間毎に配布し主としてこれについて説明するという形式をとった。その内容をみると、肥料、石炭、高温タール、染料、油脂、重要鉱石ならびにその製品など重要な工業所産商品を取りあげて、これらについてかなり微細な点まで記載されているのに気がつく。口述筆記の方法では到底触れることができないことまで極めて詳細に記載されている。プリントにより教育効果が十分あがったことを認める一方、毎年新にこれら大量のプリントを準備する教育的熱意にも敬服せざるを得ない。

木村氏の商品学は応用化学を基礎にしている。従って商品の学習に当っても応用化学の知識を習得していることを要求している。氏の商品では応用化学製品の記述的な面が最も多いが、なお商品に関する他の事項例えば関連法規、商品の分類、品位決定に際しての試料採取方法、品位決定の方法としての分析、貯蔵中の商品の品質変化などのことも適度に配していて単なる応用化学の講義ではない。今その講義の一端を知る意味で木村氏の商品学プリント中から重要商品である肥料について記してみることにする。氏は肥料の取扱いの第一に関係法規を要約してあげ、法の精神を説いて商品を取扱う場合その態度の決定に役立たせるようにしている。次いで詳細な肥料の分類を示し、第一にカリ肥料、第二に燐酸肥料、第三に窒素肥料を取扱い、カリ肥料においては実用カリ鉱石の名を列挙し、その性状を明示し、鉱石からカリ肥料の抽出の方法を概説し、世界的カリ源を論述する。しかしカリ肥料購入についての径路、包装、包装単位、取引慣習、取引商社などについては必ずしも触れてはいない。この点は奈佐商品学と異なるところである。燐酸肥料についても同様なことが言える。すなわち鉱石の生産状況、分類、採鉱、選鉱、燐分の検定、過燐酸石灰の製法検定法、重過燐酸石灰、沈降燐酸石灰、トーマス燐肥、骨粉

などを論じている。また窒素肥料についてはチリ硝石、硫安、石灰窒素、硝安、尿素をとりあげ産出状況、生産方法、性質、品質、生産高、輸入額を列挙している。

このように講義の極めて一小部分である肥料のみについても四百字詰五一七枚に相当する印刷物が配布されている。商品全般にわたると恐らくそれは幾千枚にもなると思われる。この大量のプリントが全部残存しているわけではないので正確な枚数はわからないが木村氏自ら毎年更新して配布したその努力には敬服せざるを得ない。商品学の教師として最も功績が大であったと学内で一部に評価されているのももっともな事と思われる。商品としての肥料の講義もこれを応用化学としての肥料の講義としたとしてもこれ以上詳説することは不必要と思われる程克明詳細に記述されている。木村氏は高等商業時代長く応用化学を担当し、後商品を担当したのであるが、その二者のプリントを比較すると講義の内容に精粗、量の多少の差はあるけれども、取扱う根本的の態度には大差を認めることはできない。それ程氏の商品学は応用化学に徹したのである。商学徒に応用化学の知識を与える面において随一との称があり、この時代わが国の商品学の性格にも影響を及ぼした。

奈佐氏は昭和二年退官し昭和四年に佐藤弘氏がこれに代って商品を担当することとなった。奈佐氏が食料品、繊維品など多くの商品をとりあげ講ぜられたのに対し佐藤氏は商品のうち世界貿易品として重要なもののみを講ずるとして繊維、ゴム、穀物などを取扱かったが中でも繊維品を重要視し、講義で取りあげる品目は主として繊維品に限られている。氏の商品学は専攻の経済地理学を背景とし、立地論的の取扱いが強く出ている商品学である。その他については、むしろ自然科学的色彩を帯びた商品学であると言える。氏は昭和三五年三月まで三二年の長きにわたって商品学を担当された。その間その社会的地位、幅の広い人柄などによって商品学の学内における地位を確立せしめ、さらに一橋の商品学を日本における商品学界の主導的立場におく基礎を築かれた。これは一つには一橋大学の伝統を示すものであり、同時に佐藤氏の一橋商品学への功績を反映したものと思われる。

木村氏は昭和十二年退職、昭和十三年には専門部で教壇に立っていた河合諄太郎氏が木村氏の後継者として商品の講義を担当することになった。ここで特筆すべきこ

とは大学の講義の名称は奈佐、木村両氏の時には共に「商品」であったが、河合氏担当のものは「化学商品」と称して佐藤氏担当の商品と区別したことである。奈佐、木村両氏の時代にも前述のように講義の内容に差異はあったがここでそれを明瞭にしてその分野を明確に規定したものと思われる。河合氏は高等商業時代の一橋の卒業生であり奈佐氏の商品学を聴講しており、母校の大学の教壇に立ったので、ここで初めて教授者の中に師弟関係が生じたわけである。これは一橋商品教授陣に今迄見られなかった新しい関係である。しかし河合氏は東京高等商業卒業後ＭＩＴにおいて化学を専攻し学位を得た化学者であり、一橋における講義は木村氏のように応用化学を主にした商品学であって、その内容は師弟相継ぐというものではなかった。氏は昭和十七年に南方に派遣され、帰朝すると退官されたので大学の講壇に立ったのは数年に過ぎない。しかしこの短い間に商品学に関する著書も多く出され、また日本商品学会の前身である商品教育協議会を主宰し、殊に中等教育の商品科の指導には力を尽くし大きな貢献をなしており、この方面で氏の商品学が浸透していくこととなった。

河合氏の化学商品は氏が南方勤務となってから休講であり、帰朝退官されたあとも休講が続いたが、漸く昭和二二年から、それまで大学予科と専門部で化学を担当していた石井氏がこれを継いで講義することになった。

石井氏の講義は商品および商品学、商品学史、商品分類、商品規格のような商品学の一般論を述べた後、各論として広い意味で化学商品と言われている金属（鉄、銅、軽金属）、酸、アルカリ、食料品、肥料、窯業製品、パルプおよび紙、ゴム、合成樹脂、繊維、油脂および関連物をとりあげ、これらを講じられると同時に演習として実験を課し、これら化学商品について品質の科学的検査の理論を体得させると共に、わが国および外国の商品に関する規格、機能などの理解を容易ならしめようとしたものである。石井氏の講義はこの意味で河合氏のとった態度を受け継いだものであって著るしい変化は認められない。更に言うならば木村氏の商品学の態度を継承しているということもできる。一橋商品学のうち化学商品についてはすでに定った一定の型ができていてそれを確実に受け継いだのである。商品の実体の認識という点に重きをおき、品質検査という意味で商品学を履習する学生

に実験実習を課するという取扱いもその一つの表われである。なおこの実験実習は昭和三三年より「商品検査」という名称の独立した科目となった。

昭和二四年新制大学が発足した際、従来の商品および化学商品は共に商品学と改称された。これは大正五年商品学を商品と改称して以来のことである。この商品学は講座の配当を受けないまま商学部の貿易及市場部門に配置され化学担当の石井氏が商品学第一として化学商品を、経済地理担当の佐藤氏が商品学第二として繊維商品をそれぞれ講義することとなった。商品の名称が商品学に改称されたのは新制大学の学科名に依ったもので、商品学の内容を検討しての事ではなかった。しかし昭和二九年になって商品学の講座が認められた。一橋商品学にとっては、この講座の設置如何によってはその将来が決定されてしまう重大な岐路に立っていたのである。商品学講座設置認可は、当時における商品学の批判あるいは商品学担当者の批判などという問題を超越した一橋の伝統の力であったことは論を俟たないが、純粋の化学者として一橋に着任した石井氏が一橋大学に積極的に溶け込み一橋商品学の伝統を確実に継承し理化学教室を預る責任者として商品学を学問として体系づけるよう常に努力してきたことも大きく与って力あるところとなったと言えよう。かくて講座制による商品学の設置は国立大学中一橋大学が唯一のものとなった。それだけに商品学に対して一橋大学のもつ使命は重大であると言わねばならない。

石川氏にその源を発した自然科学的商品学は木村氏の商品学、河合氏の化学商品を経て石井氏の商品学第一に、次いで昭和三三年からは化学商品となりその取扱いには一つの伝統が形成されたと言ってよい。

大正十二年の震災は一橋の校舎を全滅に近い程破壊した。商品陳列所もこの災害から免れることはできなかった。明治十九年ベルギー人商業博士アルチュル・マリシャルを商業学科教授および商業商品陳列所整理方担当として招聘し商品の蒐集整理を目指していた一橋は明治二一年商品見本陳列所を開所した。これは商議委員益田孝の欧米商業視察巡覧に際し同氏に商品蒐集を依頼し、以後到着する商品をもとにして、さらに旧外国語学校所属高等商業学校より引き継いだもの、第三回内国勧業博覧会において宮内省が買上げた後下付したものおよび内外国有志者により寄付されたものなどを加へ完全な商品陳

列所を作ろうとしたものであった。この商品陳列所は震災による焼失後は復活されなかった。商品陳列所は高等商業学校時代早くから完備され、実物について教授するという初期の教育精神の目的を果たしてきたのであるが、時代の推移と共に陳列所に対する考えが変ってきた。すなわち時代に順応して諸商品を蒐集し整理陳列することは実は容易ならざることであって一歩誤まれば陳列所はこれら商品の物置場となってしまう。これが震災を機として失った陳列所が復活されない最大の理由であった。震災後はこの陳列所に代り商品の原材料的のものを集めて機動的に授業に使用する方針がとられた。大学の校舎が神田から国立に移転してからは商品教室の一隅に商品陳列室をおき、商品に関連した原材料を蒐集整理した。これと共に完全に近いまでの化学実験室が作られた。これは商品を化学的に検査することを実習させる室である。商系大学であってこのような実験室を有するということは一橋大学の商品学の一つの特色ということができる。このような商品学教室を企画したのは木村氏であるが、これを承認したのは一橋大学であり、全学が商品学に対して理解を示してくれた結果である。

第二次大戦中一橋は幸にも空襲による破壊を免がれ、大学の建物その他の設備は無瑕のままに残ったが、商品学教室の機器類は古びたり破損したままの状態であった。また薬品はビンから溢れ出て変化してしまいその内容物が何であるか判定できないという惨憺たるものであった。石井氏はこの惨状から脱出する仕事にとりかかった。それは乏しい予算の下で荒廃した理化学教室を整備、復興するという忍耐と努力を要するものであったが立派にその目的を達したのである。

石井氏は戦後、商品学あるいは商品学担当の批判という事態に遭遇する一方、商品学教室の物理的復興を進めねばならなかった。これらの問題に対して氏は誠意と熱意とをもって事に当たり多くの困難を克服し、遂に商品学を一橋の学問の中に定着させると同時に戦中に荒廃した商品学教室を見事に整備復興した。これは氏の大きい功績である。商品学は新制大学発足以来、貿易及市場部門に配置されていたが、昭和三八年から商品第一、商品第二および商品検査の三科目を有する商品学部門が設けられ貿易及市場部門より移管されることになった。商品学部門への成長も石井氏の商品学に対する実績を大学が

十分評価した結果と言えないことはないであろう。一橋大学に在職中、日本商品学会の会長としても活躍された石井氏は停年を一年後にして昭和三六年退職した。石井氏退職後は昭和三三年より前期で化学を担当し次いで商品検査を昭和三五年より担当していた北原三郎氏が商品検査とともに化学商品をも担当することになった。

北原氏の化学商品は石井氏の化学商品を継承したものであって著るしい変化は認められない。一方氏の商品検査は代表的商品の品質検査を行ない検査技術を修得し実際商品の品位の真偽、商品の変質の如何を検査しさらに商品の使用価値の科学的教養を身につけることを目的としている。氏は昭和四五年退官するまでの十年間、商品学および商品検査の講義に尽力された。

繊維商品を担当しそれを経済地理学的観点から講じてきた佐藤氏は昭和二八年より経済学部教授となったが退官される昭和三六年までその講義を続けられた。しかし繊維商品に関する科目は佐藤氏の退官に伴い廃止され、これに代ってエネルギー商品に関する科目が設けられ、昭和三五年石井氏と共に化学商品を担当した橋本仁蔵氏が翌三六年よりこれを講義することになった。新らしいエネルギーである原子力の平和利用が先進国で推進されていた時代でもあってこの科目の設置は正に時宜を得たものであり、新しい時代に積極的に対応する一橋の姿を反映したものであろう。氏は石油、石炭、原子力など各種のエネルギーについて理工学的側面からこれを講ずる一方、戦後商品学会で盛んになった品質論に力を入れ、その成果を講義に導入しようと努力したが不幸病魔の冒すところとなり在任七年間で昭和四二年他界された。

なお、エネルギー商品は昭和四二年よりエネルギー商品講座となった。

北原、橋本両氏が在任中の昭和四一年、当時国立本館東側に独立していた理化学教室を東校舎に移転するよう学長から勧告されるという事態が生じた。理化学教室には商品学、物理、経済地理、数学の研究室があった。東校舎はそれまで産業経営研究所が使用していたのであったが、同研究所は昭和四一年五月に同年三月竣工した新庁舎に移転していった。この移転は商品学にとっては施設の新設による移転と異なり、古い与えられた状況下で最大の機能を有するよう適切な設備、配置を考慮しなければならず、それができたとしても以前の研究教育設備

と同等又はそれ以上の機能が発揮できるかどうか危ぶまれ、にわかにその可否を決定できるものではなかった。しかし東校舎を自由に使用してもよいこと、現在よりも使用面積が増加すること、整備には十分な援助が与えられることを条件に東校舎への移転を承諾し、昭和四二年商品学は他の教室と共に国立本館の東側建物から東校舎に移転した。移転後、昭和四二年に岩城良次郎氏、四三年に井出野栄吉、四四年に片岡寛氏と三人が着任し徐々に先任者と共にその整備にあたっていった。

昭和四五年からは岩城良次郎氏が北原氏の後を継ぎ化学商品を担当することになった。氏は昭和四三年以降前期で化学を講じていた化学専攻の者である。その講義は、化学商品の知識の体得を通して商品の特質を理解させることを目的としており、その内容は年度により多少の変動はあるものの、まず総論として商品及び商品学の一般論を論じ、ついで各論として食品系化学商品、薬剤系化学商品（農業用薬剤、鉱工業薬剤、医療及び保健衛生用薬剤、印写剤、着色剤、接着剤）、構造材料系化学商品（金属、化学繊維、プラスチック、ゴム、加工木材、紙、セラミック）をとりあげて講述している。また機械に関する商品に強い関心を向けられている。その商品学に対する研究態度は商品を動態論的に研究するというもので商品のライフサイクルに関心を持ち、商品生産における原料転換や製造プロセスの競合、代替の問題にも取り組むものである。一方商品学における研究方法として商品の数量と価格および品質について相関的且つ時系列的に考察することの重要性を強調されている。

商品検査は北原氏のあとを化学専攻の片岡寛氏が昭和四四年から担当した。氏は商品検査の目標を商品の品質を検査し品位を鑑定することは商品の取引上あるいは取扱い上重要なことであるばかりでなく、商品が適正な品質をそなえて市場に存在しているかどうかを知る上でも重要であるとし、商品に関する品質検査の実験に受講者自らが主体的に取り組み、そこから得られたデータの社会科学的意味を考察することとしており、それぞれの年度で変動はあるものの、食品関係、化学商品関係、金属関係、エネルギー関係商品について実習実験を行なっている外、年に一ないし二回程度の工場見学を実施し実地教育にも力を入れている。また一方商品学をその全般にわたって幅広く研究されている。

前述のように商品学教室は東校舎に移転することになった。移転の際それまで旧商品学教室にあった標本および一橋が神田の旧校舎から国立の新校舎に移転した時にそれと共に送られてきたが、以後全く整理されずに放置されたままになっていた商品標本は東校舎の一部を標本室にあて整理陳列していった。北原氏は標本室の整備を念願としながらその途中で退職するところとなったがその意思は岩城氏、片岡氏に受けつがれ両氏により新しい企画の下で多種にわたる商品が蒐集され標本室としての機能が整えられつつある。

初めてエネルギー商品を担当した橋本氏は昭和四二年他界した。昭和四三年から井出野がこれを引継いだ。エネルギー商品は新しい講座であり、また前任者の在任期間が短かかったため一橋におけるエネルギー商品の方向は示されているとは言えない。井出野は原子力、石油、石炭を中心にして、初期にはこれらを科学的側面から捉えた講義を行なっていたが、徐々にそれに社会的、経済的および政治的側面からの考察をも加えてエネルギー商品の動きをマクロ的に論ずるようになった。

そこでは、化石燃料や原子力などのエネルギー商品の発生および成長は、科学、技術の進歩によるばかりでなく、経済的要因、社会的要因、政治的要因などによっても左右されていることを明らかにするため、エネルギー商品を綜合的な立場から眺めようと試みているのである。

四

戦前の日本における商品学はドイツ商品学の影響を受け自然科学的色彩の強い商品知識ならびに商品鑑定に力をおいたものであって、その学風は今日でもなお強いものがある。一方、米国においては商品学という固有の学問は独自に形成されてはいないが以前からこれに類似したものとして商業地理学があり、この中で商品の売買に力点をおいた商品研究が行なわれていた。戦後このような形態の商品研究がわが国にも導入されるようになり、ここにわが国の商品学はドイツ流の商品学研究と米国流の商品研究との影響を受けるに至った。

かくて石井氏は一橋論叢の一橋大学八十周年記念号において「商品学が商系大学に課せられる以上、商学系学科であることの特質がなければならない。商品学を介して応用化学の知識を教授することが商学徒に必要である

としても、それは商品学の第一義には当らない。ここに商学の一分野に取り入れられたという根本的の問題を認識して、その方面をも昂揚することが今後必要である。化学商品に続いた商品第一について殊に必要である」と自省し、商品学は商品の生産、流通、消費の三段階にわたって、社会科学的、商学的立場と自然科学的、技術的立場との二方面から商品を研究していく学問であるとし、商品学の研究対象の重点を流通過程におかれた。また同時に、生産と消費の両過程は流通過程において商品の研究を完備させるために重要な役割を演ずる分野であるとの考えを示されたのである。

われわれはこれまで一橋商品学百年を回顧してきた。その中でわれわれが関係した一橋商品学担当者はすべてその時代々々において最高最善の研究、講義をなしてきたことを強く感じ、尊敬の念を抱くと共にこれらの碩学を持ったことに大きい誇りを感ずるのである。これら諸先達のうち建てた学問の成果の上に今日の一橋商品学が存在しているのである。勿論、今日、これまでの商品学をみるとき時代の変化のためあるいは一部陳腐さを感ずることもあるが、これは学問研究は常に動いて止まないものであることを考えれば必然的なことであり、学問、研究の進歩によって当然生ずることである。商品学の研究にあたっては過去の伝統を十分尊重した上で新しい知識を導入し、十分批判に堪えられる知識の体系としての一橋商品学を確立する必要がある。一橋の新らしい商品学は石井氏が商品学について自省されたときすでに胎動したと言ってよいであろう。一橋商品学の継承と商品学における独自の分野の開拓、拡充およびその総合はわれわれに与えられた大きな課題であると考えるのである。

（本稿のうち昭和三十年頃までの記述は、二、三の文字を書き改めた以外、石井頼三、一橋論叢第三四巻第四号三五頁に掲載された文章によったものである。）

参考文献

高等商業学校（東京高等商業学校、東京商科大学）一覧
石川巌　重要商品誌
文部省蔵版　商業博物誌（上巻及下巻）
博物館版　日本商品学
木村恵吉郎　大学商品ノート
専門部応用化学ノート
奈佐忠行　専門部商品ノート

東京商科大学　日本商業教育五十年史
石井頼三　一橋論叢第三四巻第四号三五頁
一橋大学　一橋大学年譜Ⅰ（明治八年八月―昭和二一年三月）

一橋大学学制史専門委員会　一橋大学学制史資料
（一橋大学教授）